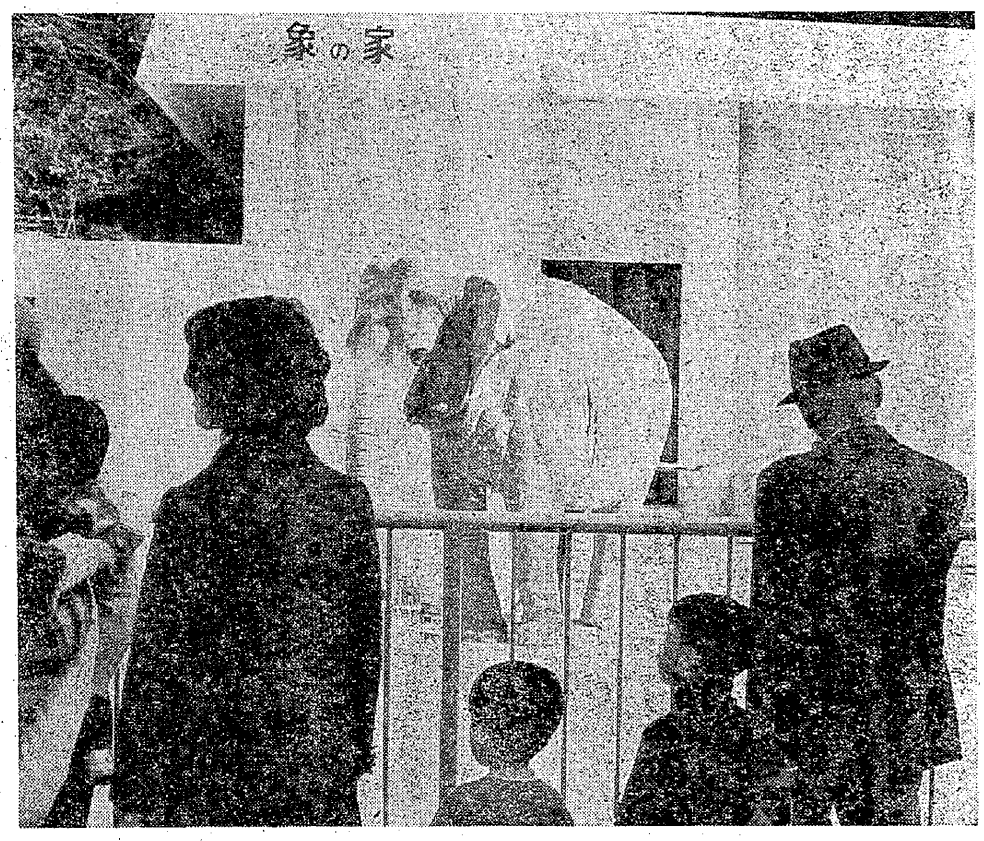

まだ元気のよかつた頃の、延命動物園の象の花子。再びその巨体を見ることのできる日があるだろうか。

倒れた象に、相次ぐ激励

生き続けてくれ花子

火の消えた感じの延命動物園

今、大牟田市民――とくに子どもたちの間に、病気になって倒れている大牟田市立動物園の象の〝花子〟を救え、との運動が広がっている。

延命公園のなかにある大牟田市立動物園（永江国光園長）には、七十五種類、三百七十点の獣鳥類が飼育されていて、日曜日や休みの日などにやってくる子どもたちに愛きょうをふりまいている。なかでもいちばんの人気者が、象の「花子」である。

ところがその花子が、この頃病気でたおれてしまい、ついに子どもたちの前にその巨体を二度と現わすことができなくなり、同動物園をおとずれてくる子どもたちをがっかりさせているのだ。

右前脚を脱臼

花子はインド象で、二十六歳（人間なら五十歳くらいと。昭和三十年頃の誕生？）。

この動物園にやってきたのは昭和三十二年の三月。五百キログラムだった体重が、二十三年たった今では四・五トンに。「人間にすれば八十人分ほどの体重です」、と園長さん。聞けば、その性質がひじょうにおとなしく、従って飼いやすく、ついぞこれまで病気したことはなかったよし。

ところが何の拍子でか、六月ごろのこと、花子は右前脚を脱臼してしまい、その脚をひきずりながら歩くようになった。

以来、残った三本の脚で巨体をささえていたが、健全だった左前脚に体重が加わることとなり、それを痛める結果になってしまった。ところが資本家は金もうけのために、日の丸の旗や靖国神社への、国民のもつ思いをたくみに利用しながら、再び軍備を強化していっています。許される道理がございません。

私たちはもうもの心ついたときから、いや応なしに戦争に協力させられたからとはいえ、今は心に戦争加担者としての負い目を感ぜずに生きていくことはできません。再び誤まちを犯すことは何としてでも許されないことで、またこの間、長崎で開かれました原水禁大会にも参加して、今さらながらみんなの平和への決意にふれ、意を強くして帰ったところです。

現に私の家の近所にも、長崎の三菱造船所で、徴用や学徒動員で働いているうち、原爆に被爆した人が少くありません。死んだ人、命からがら逃げ帰ってきた人びとなど。逃げ帰ってきた人で、一週間もたつと頭髪がぞろり抜け落ちたり、歯ぐきからの出血が止まらなかったりしながら苦しみもだえ、次々に死んでいった若い人たちの顔や、まわりの人たちの嘆き悲しむさまを思い出し、今も胸のうずく怒りを覚えざるを得ないのです。

×

この欄へ、主婦会会員皆さんのご協力をお願いいたします。

――編集部

女の目

原水禁大会に思う

主婦会本部　島　文枝

太平洋戦争敗戦のその日、近所の人たちが松根油（松ヤニを戦闘機に使用するというので、政府の命令で、順番制で採集していた）採りや野良仕事を放り出して、悲しそうな顔で「日本は戦争に負けたげな。お昼にラジオ放送があるげな」と、町の方から流れてきたうわさを中心に語り合っていました。

「デマじゃろうな」、と口々に騒ぎながら、人びとは、町役場に勤務していた父のところに集まってきたのでした。

私も夏休み中で、家にいて、その人たちの話を聞きましたが、心臓の止まるようなショックを受け、目の前が真っ暗になりました。「この先どうなるのだろう」と思うと、毎日のように日の丸の小旗をふって、出征兵士を見送ってきた人びとの顔が目に浮かび、じっとしている気がせず、近くの山の中に建っている氏神様の境内に駆け登り、どうか敗戦のうわさがウソでありますように、と一心に祈った私でした。今にして思えばバカげた話ですが、当時の国民教育によって私たちはだれしも、ひたすら戦争に勝つことばかりを信じ、戦争政策に奉仕していたのでした。

それから、三十五年たちましてこのほど本欄を通じて、田上勇さん（本欄の執筆者）に、福岡県粕屋郡古賀町久保一九二五―一二八二にお住まいの木下幸雄さんという方から、園芸についての問い合わせ（郵便で）がありました。園芸愛好者にとって参考になると思い、こんどは木下さんの問い合わせのお手紙と、これに対する田上さんからのご返事を、それぞれ本文のまま紹介します。どうか、このようなお問い合わせを寄せていただくようお願いいたします。

――編集部

園芸

モクセイは潮風に弱いのでしょうか

木下さんから寄せられた質問

問い合わせ

暑中お見舞い申し上げます。

皆様お元気ですか。私やっと住宅を新築しまして、以前から親しくしてきた庭師さんに造園を依頼し、完成しました。

今日配達された新聞〝みいけ〟（第一一三六号）の園芸記事を読んでいるうち、田上さんに尋ねてみたら、と思うことがありますので筆をとりました。

×

金木星と書くかどうかも知りませんが、モクセイの香りが非常に好きですから、造園の折りモクセイは一～二本植えてくれるよう強く希望しました。

私の住居は海に近く、「潮風に弱いモクセイは成育しないし、自然消滅するだけ。しかし友人の希望だから植えてみます」、とのことで二本定植しています。

一カ月すぎた今弱っていず、一見して元気です。それでも、庭師の言葉は不安を残しています。海岸近くでも育っているモクセイを見受ける、と耳にすることもありますが……実績はどうか判りませんし、迷っています。

以上の件でお判りになっているのでしたら、教えてくださいませんか。（後略）

おこたえ

モクセイは、木犀と書きます。

木犀は中国原産の常緑樹で、日本には金木犀と銀木犀、それにヒイラギとの交配種のヒイラギ木犀があり、花は十月上旬頃咲き、繁殖は七月頃さし木でふやします。

お尋ねの件についてはあまり知られておりませんし、私もくわしくは知りません。ただ、思い当たることを記して見ます。

木犀は、大牟田でもよく育ちません。これは、大気汚染が原因だと思います。

海辺付近で育たないのは、土壌が酸性のためではないかと思います。たとえ新しい土を入れても、そのうちにまた酸性化し、枯れこんでいくということではないでしょうか。

となると予防ですが、それには春と秋に石灰または草木灰を、油カスや鶏フンなどと混ぜ合せて与え、土をかぶせておきます。一回ごとに施肥の位置を変えていくとまんべんなくいきわたります。

私なども、田舎の学校で経験した金・銀の木犀の芳香を思い出すとき、新しい庭といえば、植えずにおられないのもよくうなずけます。以上のこと、注意してみてください。

×

なお、木下さんは千二百名の一人なのだそうです。

☒　☒　☒

ながつき

九月の暦

1日　二百十日。関東大震災（大正十二年）の日。（死者と不明十三万余人）

この日、第二次世界大戦争開始（昭和十四年）。

また学校の二学期始まる。

社会福祉月間もスタート。

2日　東京湾のミズリー艦上で、敗戦日本降服文書に調印（昭和二十年）。

8日　対日講和条約・日米安全保障条約に調印（昭和三十六年）。

15日　敬老の日。この日、三池炭鉱は特定休日。

20日　被岸の入り、動物愛護週間スタート。

23日　秋分の日。この夜十五夜。

28日　三川鉱で坑内火災（昭和四十二年）。

30日　この日から十月二日まで、東京で炭労の定期大会。

×

炭労の秋季闘争、CO・遺族改定闘争の準備。九・二九坑内火災発生のこの月、職場保安の総点検を。

季節はスポーツ、レクリエーションの秋。思いっきり自然に親しもう。

さて秋の七草は――萩、尾花（すすき）、葛（クズ）、ナデシコ、女郎花（オミナエシ）、藤袴、桔梗。

倒れてもなお

ついに七月二日、四・五トンの巨体が、その場にどーと倒れてしまった。

もともと巨体の動物は、一度たおれたらもうおしまいだという。一～二週間で寿命も終る、というのが定説になっている。

ところが花子の飼育係の池田順二さんの懸命な介抱によるものか、それとも村上敏光獣医師らの手当てのおかげか、まるで定説をハネ返すようにして、花子は倒れてすでに二カ月近くも生き続けているのだ。

このごろの、花子のための一日分のメニューは、スイカ七個、リンゴ二十二個、パン三十個、フカシイモ四キログラムにササなど。けっこう食欲もあるとのこと。

相次ぐ激励

こんな花子に対して、「花子、元気になって、もう一度大きな体を私たちの前に見せておくれ」と

の子どもたちの激励が相次いでいる。なかにはスイカやトマトなどを、その姿なき花子のオリの側に黙って置いてくれる子どももあるよし。

「動物園のただずまいは、火の消えた感じだが、子どもならずとも「がんばれ花子。子どもたちのために生き続けてくれ」、と心から叫ばずにはいられない。

おねがい

家族の皆さん、この欄は三池炭鉱労働者の家族・主婦のページです。もちろん、三池新労組の組合員や社外工の仲間の家族の人々もおなじで、せひこのページに「姿見」欄をはじめ、その他の手記や随筆、詩や短歌、俳句、川柳などお寄せください。　編集部